

会議名	令和 7 年度第 1 回青梅市美術館運営委員会		
開催日時	令和 7 年 5 月 14 日（水） 14 時 00 分～15 時 52 分	場所	美術館研修室
出席者 （敬称略）	【委員】志賀委員長、佐川副委員長、牧野委員、鴨木委員、藤原委員 【事務局】橋本教育長、森田生涯学習部長、原島文化課長、田島美術担当主幹、塚本美術管理係長、村上主任、阿部主任 （欠席）白井委員、持田委員		
資料	次第、委員名簿、【資料 1】令和 7 年 2 月定例議会（一般質問）について、【資料 2-1】美術館改修スケジュール、 【資料 2-2】内装図面		
議事要旨			
1 開 会 2 委嘱状の交付 3 教育長あいさつ 4 委員長あいさつ 5 報告事項 （1）令和 7 年 2 月定例議会（一般質問）について……………資料 1 事務局から説明……………<了承> （2）空調等設備改修工事について ・空調等設備改修工事スケジュール……………資料 2-1 事務局から説明……………<了承> ・内装改修図面……………資料 2-2 事務局から説明……………<了承> （3）再開館後の運営について……………資料 3 事務局から説明……………<了承> （4）その他 6 その他 7 閉 会			
備考			
次回開催は秋。市役所本庁で開催予定。日程調整は後日。			

○ 主な質疑、意見等(別紙、発言記録参照)

1 令和7年2月定例議会(一般質問)について

(委員) 進んだことや変更点等はあるか。

(事務局) 特に進んだことはないが、次期企画展のため、他の美術館を視察するなど模索している。

2 空調等設備改修工事について

(委員) 部屋の使用目的が変わるといったことはあるか。

(事務局) 特段変更はないが、多目的に使用されていた部屋については、きちんとした展示ができるような形で改修を行う。

(委員) どのような改修を行うのか。

(事務局) 天井については、照明の配置はそのまま器具をLEDに交換する。また、床については、虫菌害対策としてカーペットをすべて剥がし、メンテナンスが容易な床材に変更するほか、壁については、壁紙を貼りなおす予定である。

(委員) 研修室は、従来どおり貸出のギャラリーになるのか。

(事務局) 貸し出す予定ではあるが、現在、運用については検討中である。

(委員) 展覧会の際に、2階の第1、第2展示室だけでは今までも手狭だったので、1階の第3展示室も連続して使うことを検討しているか。

(事務局) 収蔵庫から溢れている作品の保管場所を確保して、展示スペースとして使用したいと考えている。

(委員) 収蔵庫については、外部倉庫の借用期間を延長するのか等、長い目で見たときにどうするのか、しかるべき段階で方向性を見出すべきではないか。

(委員) 展示室は展示室として使用し、作品保管についてはきちんと検討していくべきではないか。また、美術館は、町の歴史を継承していく意味でも、その地域にとって重要な作品を収集して行くことが重要だと思う。実情も踏まえ、ある程度の保管体制が担保できるのであれば、温湿度といった保管のレベルを下げつつ、作品の収集も行っていくべきではないか。

(委員) 海外のミュージアムでは、保管環境を維持していくことと合わせ、近年、地球環境問題に対する対応が重視されるようになり、従来型の環境負荷の高い厳密な温湿度等の管理に囚われず、環境問題に配

慮した省エネかつ合理的な新しい作品保護基準が採用されるようになってきている。

（事務局）今回の空調機器の更新については、高性能な空調を入れることができなかった。欧州より高温多湿な日本において、温湿度変化の小さい保管環境を維持するのは難しいと思われる。

（事務局）外部倉庫への作品の保管については、借用中、費用がずっとかかっていく。また、できるだけ近くに保管しておきたいことも踏まえると、市内の今ある施設を改修するなどして、収蔵環境が保てる施設を作りたいと思っている。実現段階となった際には、改めて専門的な助言をいただきたい。

3 再開館後の運営について

（委員）学芸員の業務は、企画展覧会のみならず、作品の貸出や広報等様々な業務がある。その中で、財政規模、学芸員数が違うにも関わらず他館と同様の業務を学芸員 1 人体制で運営しているのは無理があるように見える。

（委員）私の勤務している館では、複数人の学芸員がおり、年数回行う企画展を 2 名ずつ交代で担当しながら運営している。そのほかにも教育プログラム等の業務もあるため、展覧会以外の学芸業務をそれぞれが分担しながらやりくりしている。それらすべてを 1 人で担当するというのは、にわかには信じられない業務量だと思うがどうか。持続可能な運営の形が採れるよう、委員としても適切な意見を出していかななくてはならないと感じる。

（事務局）3 本の展覧会を実施した令和 5 年度に関しては、内 1 本は事務の職員が担当したが、借用交渉や貸出といった業務は学芸員が行わなければならないので、業務量としては多い状況となった。

（委員）展覧会の数を減らすなど、現状の職員数でも持続可能な美術館運営の工夫を、青梅スタイルとして提案していくのも運営委員会として必要なのではないか。

（委員）一概に、展覧会の回数を減らすことが省力化につながらない場合もあるが、運営委員会で青梅市にとって理想的な持続可能な形を検討することがあってもいいのではないか。

（委員）展覧会の実施にかかるコストは上がってきている。その中で、こ

れまでと同様に実施しようとするのは無理がある。再開館は、新しいやり方、無理のないやり方で市民に貢献できるような美術館になるチャンスなのではないかと思う。

（委員）新しい美術館を目指す中で、市民に親しまれるようシンプルな名称・愛称の検討や、美術館の持続可能な取り組み案について事務局で検討してほしい。また、再開館後の活動を検討するワークショップの立ち上げや、人員不足対策としてのボランティア、協力隊の組織等について検討してみてはどうか。

（委員）再開館後に向けて、色々と計画を立てることは良いが、何をやるにしても学芸員1人の体制では、ワークショップやボランティア養成は困難であり、喫緊の課題である。行政側は何か知恵を出して、1人体制から脱却をしなければ、何も計画できないと思う。

（委員）人がいないから何もできないではなく、こういうことをやりたいから人がほしいということが必要なのではないか。アイデアを出し、計画を立てていく中で、削るべきところは削り、お金や手間がかからないよう、関わる人を増やしていくことが必要ではないか。これまで、人員の増員が受け入れられなかったのには財政の問題もあったかと思うが、今後も引き続き訴えて行くこととし、作品購入費についても本来は必要だと思う。ただ、まずは市民に愛される美術館になることを目指していけばよいのではないか。

4 その他

（委員）議論を運営委員会の中で終わらせてしまうのではなく、具体的な施策等について、各方面の専門的な方々を呼んで聞いてみるというのはどうか。

（委員）この課題は人員面の問題が大きい気がする。美術館の活動において色々あるが、それを分担できる体制があって初めて実現できるところがある。必要な人員をどう手当てするかについて、考えていけないといけないと思う。

（委員）財政や人事の壁がある。そこを突破していく知恵を作らざるを得ないのではないか。そのためにも、専門家によるワーキンググループで具体的な意見をもらい、再開館後のプランニングに反映させていけば、少しは可能性が出てくるのでは。

（事務局）人員の問題については、長年議論されてきている中で、現状が続いている。おそらくこの状況は今後も続くと思われるので、再開館後は、現状の中で、身の丈に合った持続可能なスタイルとしてやっていくしかない。名称の問題や活動など、リセットして始めるには、今のタイミングでないと不可能ではないかと思っている。

（委員）改修後の美術館において、青梅市にとって美術館を維持する意味があるのだろうかと思われるのが一番怖い。市民の期待に応えていかなければならないと思う。そのためにも、お金がないながらも、市民に向き合っているということを発信していかなければならないのではないか。ただ、学芸員が1人しかいないのであれば、年間1本の長い展覧会を実施するなども良いのではないかと思う。

（委員）年間2本だとしても2人はいないと難しいと思う。展覧会以外にも学芸員の仕事がある中で、交代してやっていくような体制が作れないと、安定した運営は難しいのではないか。

（委員）運営委員会では、これまでも再三、1人体制は無理だと言ってきた。行政も改善に向けて考えてもらわないといけないと思う。

（事務局）改修工事について、当初、内部において話が中々進まない状況にあったが、運営委員会で方針を定めていただいたことで、改修に取り組むことができた状況がある。人員についても話をいただいているので、今後、財政当局ともしっかりと調整していきたい。また、再開館後の運営についても、改めて委員会の中でアイデア等をいただければありがたい。

（委員）館の名称変更については、全体的な見直しの中で刷新があったことなど、複合的に説明していけば良いと考える。

（事務局）名称が変わればロゴ等も刷新していくと思う。休館中の今、方向性を決めるにはいい時期でもあると思うので、運営委員会の回数を増やすか、別の組織を作って揉んでいくのか等、委員のご意見を伺いたい。

（委員）再開館後の様々な課題について、年2回の会議の中だけで検討できる話ではないと思う。休館中という時間的な余裕がある中で討議、検討してもいいのではないか。

（委員）色々な課題がある中で、年2回の会議で何ができるのだろうか

考えてしまう。もう少し、課題を整理したうえで、アイデアを出すというふうにしないと集まっても意味がないと思う。

（委員）非常に大きい話で、問題も絡み合っている。その中で2時間程度の会議で、答えを求めるのは非常に困難だと思う。もう少し踏み込んだ意見がほしいということなので、必要であれば必要なメンバーを招集して意見を聴取し、運営委員会に出すなどしてもいいのではないか。

（委員）ここでのポイントは、実際の再開館後の運営方針であるとか、そういったものをどう汲み上げていくのかという、プロセスの話なのではないかと思う。何か新しく検討の場が必要ということになるだろうか。

（事務局）そのとおりである。現実には即して、当館がやれる範囲を見極めてもらい、それを提言としていただきたい。

（委員）昨年度策定した運営方針を拝見したが、これはある種、県レベルの美術館に要求される、フルスペックの規模の活動方針だと思う。この運営方針で実際に活動するとなると、極端な話、学芸員が10人くらい必要になるのではないかと思うが、個別具体的な事業および活動案が出てくれば、現実的な意見や解決策を検討することもできるのではないか。

（委員）細かい案が出てこないから、プランをもらいたいということなのではないかと思う。多方面で色々な経験を積んだ人を呼び、意見をもらうのは賛成である。このフルスペックの運営方針では無理なので、持続可能で魅力的な運営をプランニングできるよう、専門家に意見を伺うことを、早めにやってみてはいかがかと運営委員会として意見するのはどうか。

（委員）期待される美術館像というものに対応していくとして、詰まるところ、青梅市全体の行政の中で、美術館に期待されるもの、美術館をどう評価するか、ということが表れた従来の予算であり、人員配置である。市民の皆様からの多くの期待に応えて、新しい美術館としてスタートするにあたっては、これだけのことは最低限必要ではないかと、委員として申し上げている。

（委員）名称に関しては、ここの中だけで決めるのではなく、募集しても

いいのではないか。ただ、漠然と募集するのではなく、専門家などを交えて精査等をしてしながら実施する方法もあるのでは。また、最初の展覧会はどんなものになるか、市民は期待していると思う。新しくなった名称で最初の展覧会というのは、一番大事なのではないか。1人でよくやっていると思うが、1人でできることもあるので、分散させないで最初の展覧会に全員が全精力を注ぐ方がいいと思う。

（委員）再開館に対する市民の期待は大きく、相当注目を集めると思うので、再開館後、最初の展覧会が、新しい美術館のイメージを市民に強く印象づけると思う。また、コロナの影響があり、美術館のあり方をめぐる考え方も変化しつつある。展覧会で集客するだけではない、市民の日常生活の中に息づく美術館の存在意義が問われる時代になってきつつあると感じる。それに対し、対応していくことが美術館運営の難しさであり、時代とともに変わらなければならない。その新しい、有効な考え方について知恵を入れながら検討すべき非常に難しい問題で、1～2時間の検討で、後は担当者1人に任せるわけにはいかないのではないか。その辺、検討して、よりよい、その知恵の集め方等をお願いしたいと思う。

○その他

―質疑・意見等なし―

（事務局）次回開催は秋口。改めて日程調整を行う。また、電気工事のため、7月～来年1月末までの予定で、美術館事務室が市役所3階に一時的に移転する。

閉会